

# 月報

<428号>

ケルンボン日本語  
キリスト教会  
二〇一六年二月二十八日発行

## 『暗き闇に星光の』

マタイ二章一―二節

橋本 祐樹

神学生時代からの友人に赤ちゃんが与えられ、私もたまに遊ばせてもらいます。かわいいものです。子育ては大変でしょうが、本当に嬉しそうで、彼女の子育て話を聞いたたり読んだりするのが私は好きです。以前彼女のこのような文章を読みました。

「今日の私のハチャメチャっぷりを聞いてください。」

一. 洗濯機の横に浸け置きしていたおむつバケツをつまづいてこぼし、床じゅう洗剤まみれに。色々総動員して拭く。

二. 気を取り直して洗濯するもフィルターに糸くずが詰まり、水があふれ、また床が水浸しに。泣きそつになりながら拭いた後、立ち上がる時、開けていた戸棚の引き出しに背中を引っかけシコタマ打ち付ける&擦り剥く。

三. 子のおむつを替えて、お尻の穴をコチヨコチヨツンツンしてウンチを出そつとしていて、顔に吹き付けられる。こんな出方は初めて。まだ臭くないのが幸い。だが、そうこうしている間に子の足がおむつに突っ込まれており、足でウンチを練り練り。

四. 汚れた服を替えて、お風呂にも入れ、軟膏も再度二種類塗り、綺麗になったところでおっぱいをあげた。『きゃーかわいい〜今日は大変だったわ〜』と我が子を抱きしめたら、静かにミルクを吐いた。子の服も

私の服もダブルで洗濯。

五. スポンジを消毒しようと熱湯につけたらビックリするくらい縮んで小さくなったので、今度は塩素で消毒してみたら、溶けた。

六. そして、ついでに消毒した布類を入れていたポリ容器に塩素を入れているのを忘れ、切干大根を入れてしまい、全滅」。

最後にこう書いてありました。「こんなに悲しくてもお腹は減るもんでして。冷凍してあったおはぎを解凍して食べ、ちよつと落ち着いてこの文章を書いていきます。そんな中でも、吐いたおっぱいが口の中にまだ残っている時に声を出した我が子のノドが『がらからがら』とウガイみたいになっていたのは面白かった。お陰さまで、洗濯機の前、洗面所の床はピカピカであります」。

素直で楽しい、そしてちよつどいい感じで抜けている彼女は、私の良い友人です。

電話も、ごくたまにですがします。いつかの会話。

友人：明日、説教なん？

私：そつやねん。もう公現日や。博士の日。博士たちが生まれたばかりのイエス様のごころにやってきたのを覚える日。明日の聖書は博士のごころ。

皆さん、「神学部卒で、それでいいのか」と思われるかもしれませんが、電話口の向こうから友人が言います。

友人：博士たちが来たのってクリスマスの日じゃないの？

私：違う違う。クリスマスに博士は来たんじゃない。イエスさまが生まれてから、後から遅れて博士は来たんだ。

友人：ええ！！？

そつなので。イエス様がお生まれになった、その日を覚えて私たちは一二月に皆で礼拝し、お祝いしたわけです。が、イエス様が生まれたその時には、まだ実は東方の博士たちは来ていなかった。ページエントでは、それこそ一緒に羊飼いや博士も出さうのですが。今日の聖書、書いてあります。「イエスは、ヘロデ王の時代にユダヤのベツレヘムでお生まれになった。そのとき、占星術の学者たちが東のほうからエルサレムに来て、言った。『ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。わたしたちは東方でその方の星を見たので、拝みに来たのです』」（一、二節）。

イエス様がもうお生まれになった、その誕生を知らせる星を博士たちは見つけ、東の国から旅をして、後からイエスさまの生まれた国にはるばるやってきた。クリスマスから少し遅れて、この年の初めに、この博士たちの話が与えられる意味があると思います。この聖書箇所準備の際、私が下線を引いた聖書箇所は「私は心にとまった言葉にペンで線を引きますー」(一)でした。

「別の道を通つて」(二節)。

博士たちは御子イエスと出会いました。神の恵みが示され、彼らはそれを受け取りました。その後、帰りの道、彼らは違う道を通って帰っていった。

最初に話をした友人の赤ちゃんを、いつか抱かせてもらいました。私の腕の中で、彼が笑います。私の腕で、眠ります。泣いてもくれました。心のこわばりなどそこに何もありませんでした。考えてみると、わざわざ赤ちゃんの姿で救い主を屈ける神なのです。ギリシャ神話にあるような屈強な、戦士の神ではなく、キリスト教の救い主は今、赤ちゃんの救

い主です。飼葉桶の中の御子を皆で覗き込む、それがクリスマスだーと、かつてここケルンでも務めたある先輩牧師が説教で語ってくれましたが、その光景を教会でもよく見かけます。誰か信徒の方が、産まれた小さな子どもを教会に連れてやって来る。礼拝後など、その周囲に小さな人だかりが生まれます。見ているのです。笑って、触っているのです。見たいのです。見て、喜びたいのです。喜べるのです。小さな命を、喜ばせたいのです。その前で、人は励まされ、明るくされ、希望を受け取る。やさしくされます。御子イエスに賭ける父なる神の「壮大な救いのご計画」があることでしょう。でも、主なる神の願いは実際とても素朴なのかもしれない、と思えます。

今日はまた、御子イエスの降誕を祝う降誕節です。クリスマスはまだ終わっていません。博士たちは恵みを受けて「別の道を通って」出かけて行きました。恵みを受けて、その恵みにもうやられてしまつて、今までと同じ生き方が出来ません。今までの歩みとは異なる新しい道を歩みます。私たちも、私たちの救い主、赤ん坊のイエスを胸に、顔をあげて新年を歩みたい、赤ん坊の救い主をくださる主の御心のままに、御子の傍で励まされ、主の希望を信じ、やさしい思いをもつて迎えていきたい、と思つたのです。

一年が過ぎました。いただいた主の恵みに感謝し、私たちも恵みに応える新しい歩みをする事が出来るように共に祈りましょう。

(二〇一六年一月四日・主日礼拝説教)



## ケルン・ボン日本語キリスト教会を離れるに当たって

新淵 千枝子

ケルンボン日本語キリスト教会の皆さん、お久しぶりです。一月二〇日の日独合同クリスマス礼拝を最後に、私は色々な理由から、一月から三月まで説教をお休みさせていただくことになりました。主な理由は、この時期雪がひどく降ると、定刻までにケルンに來れないおそれがある事、また私の学業を三月末までに一段落させ、日本に一回帰るといふ決断をした事があげられます。そして日本に帰らせて頂けたら、再度牧師の道を歩みたい、と考えています。

昨年の四月から二月まで、私は齋藤先生のご配慮によつて、ケルン、ボン日本語キリスト教会で月一回説教をさせて頂くことになり、この九ヶ月は、本当に忘れられない日々となりました。教会に集まれる皆さんは、大変熱心に、私のつたない説教を聴いて下さり、最後の二〇日の礼拝の後では、ある方から説教について大変ポジティブな批評を頂き、とても嬉しく思いました。お世辞半分かもしれませんが、やはり説教者にとって一番嬉しいことは、自分の言葉を通して、神様の御心が少しでも的確に皆さんに伝わり、皆さんの心に残る事です。

そういう意味で、この教会の方々には、大変熱心に説教を聴いて下さり、良い批評をしてくださりました。本当に感謝に堪えません。

それにしても、今任んでいるバイエルン州のエアラングンを朝六時に立つ列車に乗り、ニュルンベルクまで行き、ニュルンベルクを丁度八時に出発する ICE でケルンに向かうこの旅は、決して短とは言えず、ケルンに着くのは二時少し前でした。途中 Würzburg, Frankfurt am Main, Bonn などの大都会を経由して、最

後に一〇〇万都市 Köln に着くこの旅は、聖書を繰返し読み返す事、無言でお祈りをする事、そして説教原稿の推敲で、あつという間に時間が経ちました。特にコブレンツからボンに近づくにつれ、美しいライン川の景色が車窓から良く見え、かの有名なローライの岩も良く見えました。自然とハミングで「なじかには知らねど、心詫びて、昔の伝えは……」のローライの歌が、心の中に浮かんできました。小さい頃から好きだったこの歌の舞台に、今自分は来ているのだ、と思うと、心は喜びに満たされ、ドイツに來る事が出来て本当に良かった、としみじみ感謝の思いに捕らえられました。ドイツには、最初に住んだドレスデンのエルベ川、バイエルン州の端をオーストリアまで行くドナウ川、そしてライン川の三つの大きな川が流れています。やはりライン川が一番印象に残っています。このような旅を積み重ねながら、私はケルンまでやって来て、日本語キリスト教会の皆さまと親しくおつき合いをさせて頂いたわけですが、ここでこの教会の会員の方々に、特に印象に残った点を、記させて頂きます。

第一の点は皆さん大変的な関心が高く、また聖書を初め、キリスト教関係の本に大変詳しく、良く学んでいらつしやる、という事です。こちらにお邪魔するようになって最初の頃、私は何人かの方のお宅に土曜日の晩、泊めていただいたのですが、その時皆さんの本棚を見て、大変驚いたのです。それは一応神学を専門に学んだはずの私でも、読んだことのない、高水準の本を、皆さんが読んでいらつしやる、ということなんです。そしてある方は、その中から、新、旧両聖書辞典を私にくださり、どうぞ説教に利用してください、と言ってくださいだったので、まだ知り合っていない人間に、こんなにも親切にしてくださいる方がいる、という事が、私を驚かせま

した。良く「良い牧師は良い信徒を育て、良い信徒は良い牧師を育てる」と言いますが、私はこの教会は「良い信徒は良い牧師を育てる」の典型的な例ではないかと思うのです。勿論私は良い牧師ではありませんが、このような信徒の方に囲まれているだけで、いやがおうでも、真剣に説教に取り組みようになりました。

そして第二の印象に残った点は、会員の皆さん全員が、非常に前向きに教会のことに関わり、教会のために働くこととされてきた点です。役員の方々はいうまでもなく、役員でない方も、全員が、なんらかの点で教会に関わり、教会のために奉仕されていらっしやいました。創立記念日やクリスマス祝会などに皆さんが持ち寄る色々なお料理やケーキ、お汁粉など、日本でもなかなか準備できないものを、ドイツで用意する、これは大変なことでした。その奉仕の姿勢一つとってみても、私はこの教会の前途について、全く心配しておりません。皆が心を合わせて、教会のために働くこととする点が、ケルン、ボン教会はしっかりしていますので、安心してまかせられるのです。

四月から新しく佐々木先生がこの教会にいらっしますが、皆さまどうか今までと同じように、先生のために祈り、陰になり、日向になって、先生を支えてくださいますよう、お願いいたします。

そして時には私の事も思い出していただいて、お祈りのうちに加えていただければ、何ものにも勝る喜びです。わたしも皆さんと教会のために、日々祈り続けます。本当に長い間色々お世話になりました。心から感謝しつつ、ペンをおきます。



本の紹介

『辰永のドイツ探検記』一全盲日本人の海外旅行』

藤井 弘子

去る二月五日、私たち夫婦は久しぶりに車で遠出をした。目的地はブレーメン。三〇年来の知人であり、今や脱原発の同志でもある戸塚辰永さんの本の出版祝いに同席する為である。

『何も見えないのに、一体何故あなたは旅行をするのか?』

これは盲目の人がよく耳にする質問だそう。私も戸塚さんと知り合うようになって、「あなたが見えると言いつ張るところにあなたの罪がある」とイエスの言われたことは度々思い出すようになった。

『買い物』

「……………視力障害者」としては、言葉のできない外国での買い物は大変だ。野菜や魚の名前が分からないと尚更。ブレーメンに着いて間もなくの頃、ボクはゲート学院宿舎の近くのスーパーに買い物に行った。目に見える者ならスーパーの売り子と言葉を交わさなくても希望の野菜を買えるだろう。ボクの場合はそうは行かない。ボクは本物のブルスト(ソーセイジ)が味わいたいという、心の底からの願望を満たすべく、肉売りの場の売り子にしっかり注文した。『ブルストを下さい』。しかし返事がない。ボクは相手が聞こえなかったと思い、もっと大声ではっきりと『ブルストを下さい』。返ってきたのは『そんなものはここでは売っていません』という、予想外に冷やかな返事だった。打ちひしがれ、キツネにつままれた心地で帰寮した。本当だろうか。この国でブルストを売っていない肉屋があるのだろうか。

後になって分かったことだが、WurstとBrustはカタカナでは同じブルスト。日本人には難しい発音のところを、ボクは大声で『Brust(胸、乳房)を下さい』と叫んだのだ。でもこれしきのことでボクは打ちのめされたりはしない。

ある日、良いことを思いついた。買い物時に『クイズ』をすれば良いのだ。ボクは『大根』という単語が分からなかったため、『白くて長くて辛い野菜はなんなんだ?』。周りの客がピストルを打ったように一斉に『Retich』と叫んでくれた。ざっと、こんな風にボクは大根を手に入れた。一打ちで二匹のハエだ。この日ボクは機嫌良く帰寮。ただ、料理をしてみると、この大根は固く、スジがあり、木のようだった。その後、希望の品を入手するのに、ボクはこの手を愛用した。しかし、缶切りが欲しかった時には、いつものクイズ方式が効かなかった。そしてまだ続きがある……………」

『ネオナチの「正義」と市民の良心』

「……………一九三九年九月一日に出された、ヒトラーの秘密指令『障害者の安楽死計画』が施行され、少なくとも七万人の障害者が殺害された。このテーマは一九七〇年代までドイツではタブーとされてきたが、一九八〇年代になって政府はやっと、これらの不法を謝罪し、損害賠償を果した。

或る朝大学への道を急いでいると、いつも道ばたに座っている、アル中で麻薬中毒の男が、自分の膨らんだ不満のハケ口をボクに向けて爆発させた。

『オイ、メクラの外国人。早くドイツから消えろ! お前がナチ時代に生まれていれば、真っ先にガス室に送られて、とっくに始末されているんだゾ!』。ボクは男の侮辱を無視して電車の方に向かったが、

通行人が次々と声を掛けてきた。『どうぞ許して下さい。私はあの男の罵りを聞きました。同じドイツ人として全く恥ずかしいです。本当に「ごめんなさい。』と.....』

〈著者紹介〉

一九六四年 静岡県磐田郡生まれ。一〇歳の時事故により失明。

一九八八年〜一年間フレイメン・ゲート学院でドイツ語を学びつつ卒論(明治大学)の資料収集。

一九九四年〜一年間フレイメン大学留学。修士論文(千葉大学大学院)『ナチ時代に於ける視覚障害者』の準備のため。

二〇〇四年〜 点字誌出版社「東京ヘレン・ケラー協会」に勤務。特に月刊点字誌『点字ジャーナル』の取材・編集に力を入れる。その間(二〇〇四年一月〜二〇〇八年四月)、同誌に掲載したドイツ滞在中のエピソード五二篇を纏めたものが、この本である。(ドイツ語訳はプロの翻訳者「よめる」)

晴眼者には想像できないような、時には過酷な「災難」を機知と止まない好奇心で乗り越えつつ、鋭い人間観察で読む者を引き込む一冊でした。スペースの関係で少ししか紹介できないのが残念です。どうぞ「一読を。」

書名(ドイツ語): "Tatsunaga erkundet Deutschland: Ein blinder Japaner reist in Ferne Länder"  
出版社: Macambo Verlag e.K., Bremen, 2016  
ISBN: 978-3-944979-02-1  
定価: €18.95

◇ 報 告 ◇

クリスマス礼拝 二月二〇日に行われたクリスマス礼拝には大人三〇名、子ども四名が出席しイエス様のご降誕をお祝いしました。礼拝後の祝会にはボンヘッファー教会牧師のグェバルト先生も出席され、楽しくメッセージを伺いました。

新年礼拝 一月三日には新しい年を共に祈りつつ始める「新年礼拝」が行われました。礼拝後は持ち寄りのおせち料理を囲んで新年会を行い、交わりのひと時を過ごしました。

ギョートゲマン春子姉が一月三日付けで当教会の会員に復帰されました。

二〇一六年定期総会が二月二四日に開催されました。二〇一五年度活動報告、および会計報告が承認され、二〇一六年度予算案が可決されました。二〇一六年度の役員は前年に引き続き、尾畑秀治、シュミット亜弥子、藤井隼人各氏が選任されました。

一月一七日、日本基督教団世界宣教委員会による佐々木良子牧師の派遣式が、小松川教会において恵みのうちに執り行われました。佐々木牧師は三月二九日に来独の予定です。

また、佐々木牧師の活動を支援する「佐々木良子宣教師を支える会」のホームページが出来上がりました。当教会のホームページにもリンクできるものになっています。(http://yokosasaki-missionary.com)

佐々木良子牧師の来独準備と「佐々木良子宣教師を支える会」の活動が守られますようにお祈り下さい。

◇ 予 告 ◇

三月の予定

- 三月六日 説教 國津信一牧師(愛餐会)
- 三月一〇日 ケルン家庭集会 一時より(シュミット姉宅)
- 三月一三日 説教 齋藤篤牧師(動画/音声)
- 三月二〇日 説教 橋本祐樹牧師(聖晚餐)
- 三月二七日 イースター礼拝・祝会 説教 橋本祐樹牧師

※この日から夏時間に移行

【礼拝場所の一時的移転のお知らせ】

現在礼拝場所となっているティートリッヒ・ボンヘッファー教会の改修工事のため、七月一〇日〜九月一日の間、下記の教会にて礼拝を行います。礼拝時間は通常通り一四時からです。

**Paul-Gerhardt-Kirche**  
Gleueler Str.106 (Ecke Lindenthalgürtel),  
50931 Köln

発行: ケルン・ボン日本語キリスト教会役員会  
Japanische Evangelische Gemeinde  
Köln-Bonn e.V.

〈主日公同礼拝〉  
会場: Dietrich-Bonhoeffer-Kirche  
住所: An der Decksteiner Mühle 1  
50935 Köln (Lindenthal), Germany  
電話: 0221-4300319 (礼拝前後のみ)  
時刻: 毎週日曜日 14:00-15:00

〈メールアドレス〉  
japevgemkoelnbonn@gmail.com

〈ホームページ〉  
http://koelnbonn.jp

〈振込口座〉  
IBAN: DE97 3601 0043 0587 6034 38  
BIC: PBNKDEFF